

1 性感染症クラミジア・トラコマチス及び
2 淋菌の遺伝子検査 SDA 法と PCR 法 2 法の検討

3
4 ○岡崎果林 前田敦生 露木勇三 吉田隆 久保勢津子
5 (株式会社サンリツ)

6
7 【目的】近年、クラミジア (*C. trachomatis* 以下 CT)
8 や淋菌 (*N. gonorrhoeae* 以下 NG) による性感染症が
9 増加傾向にあり、咽頭の淋菌感染も増えている。当
10 施設では、CT、NG の遺伝子検査は PCR 法(ロシュ社)
11 や DNA プローブ法(富士レビオ社)で測定していた。
12 DNA プローブ法では感度が低いこと、PCR 法では NG
13 目的の咽頭検体で口腔内常在菌の *Neisseria* 属と交
14 差反応を起こし、不適とされていることから、咽頭
15 検体に対し特異性・感度の高い検査が求められてい
16 た。今回、核酸増幅法の一つである SDA 法 (strand
17 displacement amplification, 日本 BD 社) が咽頭
18 における NG 検査に対しても保険適応となった。そこで、
19 PCR 法との比較検討を行ったので報告する。

20 【方法】1. 相関：PCR 法で用いた臨床検体(膺分泌
21 物、咽頭擦過検体、以下スワブ) 70 件及び、尿 98
22 件を SDA 法で測定し相関を検討した。

23 2. NG の交差反応：健常人 12 名 (2、30 代男女) の
24 咽頭擦過物を SDA 法、PCR 法、培養法にて NG の有無
25 を確認した。

26 【結果】1. 相関：CT 検査のスワブ検体、NG 検査の
27 尿検体の一致率は 100%、NG 検査のスワブ検体は
28 98.6%、CT 検査の尿検体は 98.0%であった。

29 2. NG の交差反応：PCR 法で 4 件陽性、SDA 法及び培
30 養はすべて陰性であった。

31 【考察】相関データから、両検査法に高い一致率が
32 認められた。NG の交差反応については PCR 法で交差
33 反応による擬陽性が確認され、咽頭 NG に対し SDA 法は
34 PCR 法より特異性が高い検査と考えられた。

35 【結論】以上のことから、SDA 法は PCR 法とほぼ同
36 等の感度があり、また NG の交差反応による再検査や
37 擬陽性を減らすことができる、優れた検査法と考え
38 られた。